

おわりに

2001年、僕がはじめて本を書き、その書名を『再分配政策の政治経済学』とした時、その序章に次のようなことを書いています。

多くの人は、わたくしが社会保障を考えると言いながら、なにゆえに、ほぼすべての章にわたって〈権力の話〉が登場するのかが奇妙に受け取られるかもしれないし、ヴェブレン、ミュルダール、それにガルブレイスの考え方が、分析の基礎になっていたり、ここ数年の研究のなかには、マキャベリの話などが出てくることにつながりを疑われるかもしれない。しかしわたくしのなかでは、これらはすべて、十分に、社会保障論なのである。これを弁明するためにも、わたくしが学部のゼミの時から「先生」であった藤澤益夫先生が、その著『社会保障の発展構造』のなかで、多角的な論題を取り扱いながら、一つの社会保障論の構築を試みた際に引用された古人の言葉を、ここにも引かせてもらおうと思う。

いくらいろいろな野菜がまじっていても
全体はサラダという名のもとにまとまっている
モンテーニュ

これを書いたのは30代ですから、あれから、20年近く経ちまし

おわりに

た。このへのへの本第3弾では、いろいろな野菜が入っている社会保障論を自分なりに調理してみたという感じでしょうか。

僕はよく、社会保障をたとえて、大海に浮かぶ小舟という話をしています。社会保障というのは、大海、つまり財政金融政策と人口構造の上に浮いている小舟のようなもので、小舟の様子は、大海の有り様次第なんですね。だから、社会保障の研究、制度設計を考える際には、「財政は分かりません、金融は分かりません、経済が分かりません」ではあってはならないわけです。

僕たちが、これまで幾度となく見てきたように、社会保障に関する政治的な公約は、国民経済との関係を抜きにすれば、なんとでも書くことができます。そしてなんとでも書かれた社会保障に関する公約の実行可能性、持続可能性を見抜き、両可能性を備えたビジョンであるのかどうかを判定するためには、社会保障という小舟が浮かぶ大海——国民経済、特に財政金融政策——への関心は不可欠となります。

ちなみに僕は、以前は「実行可能性 (feasibility)」を中心に議論をしてきました。主に年金を語ったへのへの本第1弾には、実行可能性という言葉が多くでてきます。しかし、ある頃から、当面の実行可能性があっても「持続可能性 (sustainability)」のない出来事を話題の中心にしなければならない状況に入り、以降、実行可能性と持続可能性という2つをセットにして語るようになってきました。そのあたりの事情は、へのへの本第2弾と本書第3弾を読んでもらえば、分かってもらえると思います。

Warm Heart は大切です。社会保障の関係者は、Warm Heart のもち主で満ちています。しかし、Cool Head も備えなければ、実行可能性と持続可能性の両方を備えたあるべき姿を描くことができま

おわりに

せん。そういう思いも少し抱きながら、これまでいろいろと書き、いろいろなところで話し、そして今回は、この本をまとめてみました。

* * *

今回も、勁草書房の橋本晶子さんにはお世話になりました。彼女は、はいはいと話を先に進めてくれ、いつの間にやらこの本の広告が大々的に出ていたり……まだ原稿を書いているのに（笑）。僕には、逃げ場のない環境を作り出す背水の陣作戦は効果観面のように、おかげで本書も形にすることができたようです。

この度も、本当にありがとうございました！

あっ、それと、へのへの本第1弾、第2弾に続く、航空母艦から飛び立つ3機目の戦闘機は、これが最後の緊急発進となります！第3弾の頃には、編集者の橋本さんから、「へのへのさん」と敬意をもって呼ばれていたへのへのもへじ——まあ、本の内容よりも表紙で有名になった本だったし（笑）——を、表紙、裏表紙、そして背表紙に3冊も書いてくれたわが家の画伯にもお礼を……どうもありがとう！！

2018年7月30日

市場は分配が苦手なのに繰り返しでてくるトリクルダウン

市場は分配が苦手で、政治と経済を安定化させる中間層を創出するのが苦手である。そうであるのに、分配問題は、市場に任せておけばうまくいくというトリクルダウンという考え方が、歴史的には一定の周期で表にでてくるようでもある。トリクルダウンを信じる上げ潮派と言われる人たちには、成長戦略という秘策があるのらしいけど、いつまで待っても見せてくれない。まあ、僕には彼らが、秦の始皇帝に不老不死の霊薬があると具申し、268頁に書いているように「最後は出奔、いやとんずらした」徐福と重なって見えてしまうわけで。

へのへの本シリーズの終幕となるこの本の最後の知識補給は、権丈（2006 Ⅲ）の序章に書いていた文章です。10年以上前に書いているのに、僕がおかしいと思うもの、そして望ましいと考えるものは、昔から何も変わらないようです。

ただ、当時は、本書、へのへの本第3弾を貫く「社会保障と関わる経済学の系譜」、つまりは、再分配政策の政治経済学の基礎となる考え方がまだ兆しのような状態であったようではあります。

ヴィクトリア女王統治の19世紀後半。イギリスでは、繁栄する経済が、そのまま永遠につづくと思われていた。そして多くの者は、成長を牽引する富者たちが一層富めば、その富のしずくが残り層にもしたたり落ちるために、それでよいではないかという楽観的な考えを共有していた。これと同じ考え方は、後に1980年代アメリカのレーガノミックス、特にレーガノミックスにおける税制改

革の思想的基盤となり、トリクルダウン理論 (trickle-down theory) と名付けられるようになる。この理論が、レーガノミックスと関係があることから推測されるように、トリクルダウン理論は、サプライサイド経済学や新古典派経済学、さらに小さな政府論と強い親和性をもつ。

話を19世紀末イギリスに戻そう。今で言えばトリクルダウン理論に支配されていた楽観ムードの修正を迫った事実が起こった。(ロンドンで造船業を営んで一代で財を築いた) チャールズ・ブーズ (Booth イギリス式発音)、(ヨークでココア製造業2代目を継いでいた) シーボーム・ラウントリーによる〈貧困の発見〉である。

ヘンリー・ハインドマンを領袖とする社会主義運動家たちが、ロンドン大衆の4分の1が深刻な窮乏に陥っていると告発したことに憤りを覚えたブーズは、一面識もなかったハインドマンを訪れ、論争のすえ、彼らの方法の不適切と事実の誇張を私費を投じて論証すると言明して、以後17年にわたるロンドン・サーヴェイに着手する。結果は、ハインドマンたちの訴え以上の惨状を発見することになる。

これをみたラウントリーは、それは大都市ロンドンでの特殊なことであって、地方都市ヨークでは状況は異なるはずと、ヨーク・サーヴェイに取りかかる。しかし、ここでも結果は、同じであった。

こうした〈貧困の発見〉を契機として、イギリスでは政権が不安定化し、トリクルダウン理論が支配する社会思想が修正、否定され、大規模な再分配を伴う福祉国家の方向へと進んでいく。

この動きの嚆矢に、ロイド・ジョージの1909年 People's Budget (人民予算) があった。'People's Budget' と呼ばれたのは、彼が累進所得税導入、相続税・資産課税による富裕層への増税とたばこ税・



1909年4月29日, Budget Day.
People's Budgetが入ったRed Boxを
かかえてthe House of Commonsへ向
かうデイヴィッド・ロイド・ジョージ
と同行するウィンストン・チャーチル。
当日, ロイド・ジョージのBudget
Speechは4時間半に及ぶ。

酒税の増税で貧困対策を企図したゆえであった。

イギリスでのこうした動きと並行して、先進国はそろって再分配国家への途を進んだのであるが、その進行の過程でも、トリクルダウン理論が勢いをもっては、貧困の増大や格差拡大の事実を突きつけられて、トリクルダウン理論に修正を迫る動きが繰り返されてくる。そして日本では、バブル崩壊後の税制改革——所得税、住民税、相続税、贈与税の最高税率引き下げ——をはじめとして、トリクルダウン理論が勢いをもちはじめて久しい。……

この本は、ちょうどそういう21世紀初頭の日本において出版されるものである。

権丈（2006 Ⅲ巻） 2006年1月17日脱稿

268頁に戻る